

光と影が生み出す世界にひとは魅せられる —幻燈：プロジェクション・メディアの原型—

■ 幻燈の誕生、日本への伝来

幻燈（マジック・ランタン）は、いまから300年以上前に発明された、ガラス製のスライドに描かれた絵や写真をレンズによって拡大、投影する装置で、光源にはろうそくやランプ、後にはガス灯や電灯が用いられた。17世紀頃に西欧で発明され、18世紀には日本に伝来した。日本では改良が加えられ「写し絵」として普及した。写し絵では、薄い和紙のスクリーンが用いられ、客席側ではなくスクリーンの裏側から、木製の軽い幻燈機（風呂桶に似ていたので“風呂”と称した）を映し手が胸に抱えて、画像を投影した。何台もの風呂桶から映し出された複数の画像を、スクリーン上で合成して上映することが可能で、映像に語りと音曲を加えた、アニメーションの元祖のようなエンターテインメントであった。スライドを切り替えながら投影する幻燈のイメージは現在のパワーポイントやスライド映写機などのプロジェクション・メディア、紙芝居やアニメーションの原型であるとも言われている。



マジック・ランタンのトレードカード
（作者不詳）。19世紀頃のリトグラフ
東京都写真美術館蔵

■ 幻燈の再渡来と大流行

明治政府は文明開化の一環として医学や衛生といった新時代の知識を伝えるのに輸入した幻燈を導入した。1880（明治13）年に文部省は、各府県の師範学校に対し、奨励品の名目で教育用の幻燈を頒布した。幻燈は明治20年代から30年代にかけて、初等教育の現場はもと

より、「西洋写し絵」という理解が広まって民衆娯楽として大流行し、各地で幻燈大会が開かれ、専門の弁士まで現れた。日露戦争の頃から金属製の小型の幻燈機が盛んに生産されるようになって、幻燈は家庭で子供たちが楽しむ映像装置になった。



早大演劇博物館蔵の木製幻燈機と種板（スライド）

出典：岩本憲児『幻燈の世紀』口絵

■ 幻燈の復活、スライドとして普及

映画の隆盛により下火となるものの、戦時統制下で幻燈は復活してくる。金属の映写機製造が禁止され、木製や紙製の幻燈機が作られた。幻燈は、一般の人々も簡単につくることができる投影装置として、戦中・戦後も親しまれていった。戦後復興期には、学校教育のみならず社会教育や実業教育、あるいは娯楽や企業等の宣伝手段ともなるなど、多くの場面で使われた。スライド映写機として家庭にも学校などにも普及していった。家庭では35mmカラーポジフィルムで撮った写真を鑑賞するのによく使用された。教育現場や学会の発表などでも活躍した。学会発表では青い地に白い文字を使ったブルースライドがよく用いられた。1980年頃からスライドはオーバーヘッドプロジェクタ（OHP）に置き換わっていった。

（黒田光太郎）

■ 幻燈の衰退 —映画との拮抗—

1902（明治29）年、エジソンが発明した活動写真の装置が神戸に上陸。日本で初めて上映が行われた。活動写真が民衆娯楽として急速に広まるにつれ、見世物としての写し絵は特に都市部において急速に衰退していくこととなる。一方、活動写真は発達を続け、大正時代後期から映画として発展していった。



Birdieスライド映写機。富士写真フィルム製。1951（昭和26）年から発売された映写機シリーズのひとつ。マウントに2枚のスライドがセットできて、交互に入れ替えながら連続映写ができる。家庭や学校で利用された。